

2015.12.6 待降節第2主日

人は皆、神の救いを仰ぎ見る

ルカによる福音 3:1-6

皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデガガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。

「荒れ野で叫ぶ者の声がある。

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。

谷はすべて埋められ、

山と丘はみな低くされる。

曲がった道はまっすぐに、

でこぼこの道は平らになり、

人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

説教

クリスマスに備える第二週となりました。クリスマスまであと二週間ちょっととなってきました。とうぜん宗教的な祝日としてイエスの降誕を祝うのですが、わたしたちのいまの社会ではキリスト教の祝日にのっかって、ちょうど年末にある降誕日をお祝いしよう、お祭り騒ぎだというふうになっています。それはそれでいいんじゃないの、というのがいまの日本の教会の基本的な態度です。そのお祭りに乗じてクリスマスに会堂にきてもらおうよ、まだ救われていない（未信者のことをこのような差別的な表現で呼ぶ人もまだ教会にはいます）人たちにクリスマスの真の意味をわかってもらおう、ということで予算

をかけて教会を飾りつけ、ポスターをつくり、人集めに狂騒します。クリスマス礼拝の教会堂を満席にして盛大に祝おう、年末大売出しのおなじようなクリスマス商戦さながらに教会はクリスマス礼拝に向けて大忙しです。

わたしたちセカンドチャーチはそんな大忙し、大騒ぎとは別に教会の暦日に忠実に第二アドベントの主日を過ごしましょう。

さて降誕節第一では終末の様子を福音から聞きました。第二、第三では洗礼者ヨハネに関する福音記事からイエスの降臨を聞いていきます。

皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。3:1-2

引用の一番最後に「ザカリアの子ヨハネ」と書いてあるのが洗礼者ヨハネと呼ばれる人物です。イエスの弟子のヨハネとは別人です。ルカ福音書ではイエスの母の姉の子と紹介されているので、彼はイエスの母方のいところに当たります。でもほかの福音書ではこのような記事はありません。洗礼者ヨハネとイエスの関係はほんとうのところどうなのかはちょっとわからない、というのが大方の見方だとおもいます。

さて、最初に記されている「皇帝ティベリウスの治世の第十五年」というのは年を表しています。この年月の表記方法は歴史書の年月を記す時に使用されます。たとえば赤穂浪士の討ち入りは元禄 15 年 12 月 14 日です。ここでいう元禄とは日本でつかわれている年月の表記法でふつうは年号と呼んでいます。日本の天皇の在位にあわせてその時の年号が決まります。これで年月を表現する、みんなの共通認識とする、そのことで後世の人もああ、あの頃かという具合に理解できるというわけです。いまのわたしたちは昭和と聞けばあの頃ね、とピンとくるでしょうが、大正、明治となるといつの頃だった

と実感するのは難しくなってきます。まして元禄と聞いてもいつの話？ってなります。そこで西暦という年号表記をあわせてつかうということが今の日本では一般的です。元禄15年12月14日を西暦であらわすと西暦では紀元1703年1月30日になります。いまは2015年ですのでいまから312年ほど前の出来事です。月日が違うのは元禄当時は太陰暦を使用していたので、太陽暦（西暦は太陽暦です）で表記すると日付がちがってしまいます。太陰暦を太陽暦に変換すると日付はかわってしまいます。実際の日とは違っているのですが赤穂浪士の討ち入りの日は12月14日というのが一般的認識です。赤穂浪士が葬られた泉岳寺では、現在も毎年12月14日に義士祭を催しているそうです。

「皇帝ティベリウスの治世の第十五年」とは西暦になおすとどうなるでしょう。ティベリウスは第2代ローマ皇帝で、紀元14年に即位していますから、これは紀元28年ごろということになります。なぜ「ごろ」がつくかというといま説明した赤穂の討ち入り日とおなじように当時のローマの年号が今の西暦と同じではないので、どんぴしゃというわけにはいかず、だいたいその頃だろうという言い方になるわけです。ローマンカトリック（西方教会）ではクリスマスが12月25日ですがオーソドックス、正教会（東方教会）のクリスマスは1月7日というように同じキリスト教でも教派によって日付は違うのは暦の読み方の違いから生じるわけです。

くどくどと日付の説明になってしまいましたが、イエスが地上にお生まれになる、降誕するということは日付という、いわば数え方によってどうにでも読める出来事としてではなく、それこそ神の子の降臨日という絶対的な出来事なのだということをあらためて認識しようじゃないか、という奨めというか提案です。かたい言葉でいえば、相対的なこと、絶対的なこと、を見分けようじゃないか、ということです。とかく相対的な事柄に振り回されてしまいがちなわたしたちですが、ほんとうに確かなものに頼っていこう、本当に

確かなものを見分けよう、という奨めです。

さて、西暦紀元前 28 年ごろにザカリアの子ヨハネ、またの名を洗礼者ヨハネがなにをしたのか。ルカ福音書によれば、すこしややこしいですが、他の預言者の言葉どおりに振舞った、ということです。洗礼者ヨハネは預言者イザヤの預言にしたがって、荒れ野で悔い改めの洗礼を宣教した。つまりヨルダン川で浸水洗礼を施しました。

この洗礼というのが現代キリスト教においてもちょっとやっかいな事柄になっていて洗礼者ヨハネ、カタカナでいうとバプテスマのヨハネのやった洗礼方式が正統の洗礼だと主張する派閥があり、その中でもおおきく分けるとヨハネ式以外の洗礼方式はちょっとねえ派と断固認めない派となります。正統派、主流派の洗礼方式はヨハネ式、浸水式を採用していません。

洗礼者ヨハネをどう解釈するか、ということでキリスト教の中でもぎくしゃくがあります。ヨーロッパ人、とくに地中海沿岸に住んでいるキリスト教徒たちがどのような印象をもっているのかわたしは興味があります。というのは十字軍以来、騎士団というキリスト教軍事組織が発生し、なんだかんだと歴史の中で連綿と続き、特にヨハネ騎士団（洗礼者のほうのヨハネの名をとっています）は現在もマルタ騎士団として一定の勢力を保っているからです。人気があるのか、それともならず者集団として嫌われているのか？そこから遠く離れた日本に生まれ住んでいるわたしたちがマルタ騎士団ときいてどうイメージするかといえば多くの人にとって、あっそう？ていどのものです。赤穂浪士と聞いての反応とは全然違うわけですね。相対的な出来事は知っているか知っていないかでおおきく反応は異なり、その応答は大きく揺れ動くことがわかります。

きょうは福音の解説ができずにその周辺のあれこれの説明に終始してしまいました。というのは、イザヤ書はイザヤ書があるんだから、わざわざルカの引用を読むより、イザヤ書原本を読んだほうがいいんじゃないの？というわ

たしの我がままもあってのことです。
来週からはまた福音にそってお話しします。
